

親の想い～わが子と生きる～

MINOSIEN,VOL.2 H25.10.4



『君は愛されるために生まれた』

高等部保護者 高田 浩行

保育所の0歳児クラスの時に、いつまでたっても座位が安定せず、発達の様子が長男の時と少し違っていることに気付いた妻が保育士さんに相談し、当時住んでいた宝塚市の総合相談で診てもらったことが、次男^{あゆむ}歩夢の障がい^{あゆむ}に気づききっかけでした。その後数カ所の病院を受診し、大学病院で検査入院をすることになりました。結果、それまで聞いたことのない、非常に症例の少ない病名が告げられました。長男は歩くのも話しはじめるのも早かったため「歩夢は、ほかの子よりも言葉や立つのが少し遅いだけ」などとのんびり考えていたのですが、検査の結果を聞いて「障がい^{あゆむ}か…」と突きつけられた事実^{あゆむ}にただ茫然とし、その後反射的に落胆した記憶があります。「なんで歩夢が…」「歩けない…」「どうしよう…」などの、否定的で不安な思いばかりが私の頭をグルグル回りましたが、妻の抱えた罪責感^{あゆむ}は想像以上に大きなものでした。晴れない表情が増えた妻に対して、そして二人の息子に対して、私はどのように接していけば良いのか迷いつつ「しっかりせねば」と言い聞かせ、必死で平然を装っていました。

そのような中「きっと歩夢くんは、あなたたち夫婦を選んで生まれてきたんだよ」などと、励ましの意味で声をかけてくださる方も多くいましたが、その気遣い^{あゆむ}には感謝しつつも「障がい^{あゆむ}が^{あゆむ}まで自分たち夫婦…そして歩夢を選んでくれなくてよかったのに」と、事実を認めたくない思いでいっぱいになることもありました。歩夢をかわいく愛おしく感じる思いに反し、私は我が子の障がい^{あゆむ}を素直に受け入れられず、悶々としながら過ごす時期が続きました。専門病院の大きなリハビリ室の中で、周囲の様子に怖がって泣き叫ぶ歩夢に「きっとこれで歩けるようになる」と言い聞かせて、毎週訓練に取り組みせました。脳波や頭部のMRI検査などでは、歩夢自身は何をされるのかわからずただ恐怖を感じている姿に辛くなることもありました。紙おむつを使用していた小学校高学年の頃、外出先の多目的トイレでおむつの交換をしようとした際に、乳幼児用ベッドしかなくて使用できず、片腕で歩夢を支え立たせて汗まみれ便まみれになりながらおむつ交換をすることになり、涙が止まらなくなったことは今も忘れられません。

小学校の6年間は子どもの成長が目まぐるしい時期ですから、毎年の運動会では先生がたのサポートを受けてみんなと一緒に参加できる喜びを感じる一方で、同級生との体格や能力差が否応なしに広がっていく姿に寂しさも

感じていました。6年生の騎馬戦や組体操は危険を伴うから、みんなと一緒にするのは正直言って無理だろうと思っていました。ところが実際の運動会では、要所を先生が『見える黒子』となって支えてくださり、お友達の強力な理解とバックアップのおかげで、歩夢が胸を張って満面の笑みで取り組む姿を見ることができ、驚きと同時に感激でいっぱいになり、カメラの向こうが涙でにじんで見えませんでした。



中学校の体育祭では、ガッチリと体格良く成長した友達に両脇を支えられて50m走を完走し、文化祭の合唱でステージに立つこともできました。同級生のAくんが「俺、自分が変わってきた気がするんです。“歩夢というとなにか変わった”と思うんです。」と私に言ってきてくれたことがあります。幼い頃からたくさんの人に支えられ、助けられることを通してたくさん愛を受けてきた歩夢が、今度は人に影響を与える存在…愛を与える存在へと成長していることを感じた瞬間でした。

卒業式では、練習通り友達に支えてもらって車いすから立ち上がり、名前を呼ばれると大きく右手を挙げ、校長先生の前では一礼…堂々と証書を受け取ることができました。さらに、卒業生全員が通り終えた花道の最後を、友達の介助によって一步一步しっかり歩くという思いもよらないサプライズがありました。胸を張って堂々と名前のとおり夢に向かって歩く姿は感激でした。ようやく車いすにたどりついたときには、すでに退場していたクラスメイトが全員体育館の出口に再入場し、一列に並んで待っていてくれ、歩夢が列に合流したのを見届けたAくんの号令で「ありがとうございました！」と全員そろって挨拶。歩夢を出口で待つことと最後に挨拶することは、当日その場でクラス全員で決めたそうです。

これまでの生活の中で、歩夢が歩夢らしく成長するために、あらゆる環境が整えられ、守られてきたと感じることが多くあります。「ほかの子とも、できるだけ同じ経験ができるように」と日々の生活の中で細かな配慮や工夫をしてくださった保育士さん。小学校入学に備えて、私たち夫婦のリクエスト以上に保育所での歩夢の様子を何度も見に行ってくださり「安心して、うち(小学校)に来てください」と、言いきってくださった地元小学校の先生。

小学校入学時には、同じ保育所で育ったお友達をたくさんクラスメイトにしてくださり、歩夢の表情やしぐさ、好みなどを友達が読み取って、先生に通訳の役を担ってくれるといった粋なはからいもありました。家ではなかなか成功しなかったトイレでの排せつ自立も、まず日中一時支援施設の職員さんとできるようになり、その後に中学校の先生の絶大なる協力のおかげで完全に自立するに至っています。

障がいがあった後から、まるで出口のないトンネルの中にいるような気分だった私に、一筋の光が差し込むような出会いがありました。『すべての人は愛されるために生まれてきた』『あらゆる事柄には意味と壮大な計画がある』という意味の聖書の言葉に出会ったことです。歩夢という存在と、その障がいをバラバラに考えること自体がナンセンスで、私たちには思いもよらない、彼にしかできない神様から与えられた壮大な計画があるということを、確信することができるようになったのです。一足先にそのことに気付いた妻は罪責感から解放され、歩夢をそして私たち家族をあるがままに受け止め、心から愛し自由に生きています。

通訳をしてくれた小学校の同級生や中学校のAくんをはじめ、多くの人の気持ちや生活に影響を与えることが『歩夢に与えられている壮大な計画』のひとつであることを確信し、歩夢自身が『愛されるために生まれてきた』ことを日々実感しています。

歩夢は、少し先の楽しい計画を立てるのが大好きで得意です。私も歩夢のように、日々の生活や少し先の将来に希望を持ち…これからの彼自身の成長も楽しみにし、私にも全容はわからない『彼に与えられた壮大な計画』の実現を期待して今後も見守り続けたいと思っています。

以前、箕面市内の学校で講演させていただいた際に、本人の育ちの過程をまとめたスライドショーを作成しました。 You tubeにて「AYUMU①」で検索していただくと観ることができます。